

石山寺本守護国界主陀羅尼經の漢字音—漢音系字音混入の観点から—

2024年11月30日(土) 国立国語研究所多目的室

肥爪 周二

一

石山寺本『守護国界主陀羅尼經』(校倉聖教一六函一号)の訓点については、すでに大坪(1953)に報告があり、平安初期を含む六次の加点から成ることが指摘されている。その中核をなす長保頃(1000頃)点、すなわち白点第一種(卷一・二・三・四・六・七・十)および朱点第一種(卷五)の漢字音については、肥爪(2020)の研究発表において追調査の報告をし、また特徴的な拗音表記については、肥爪(2023)において見解を述べた。今回の研究報告は、漢音系字音と目される漢字音の混入状況から、当該字音点の性質を考察しようとするものである。

仮名字体は以下のようなもので、ク・ツ・フ・マ・エなどに珍しい仮名を含んでいる。ヲコト点は乙点(慈覚大師点)であることが、小林(1979)などによって明らかにされている。

符疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
		禾	ラ	ヤ	ー	ハ	大	タイ	カ	ア	
	リ	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	井	リ			三	ヒ	ニ	千	い	一	尹
									し		
有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ハ		ル	ム	ム	ハ	ヌ	フ	ス	ク	ウ
事	奉	エ	レ	江	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣
	キ	ハ	シ	エ	メ	ヘ	ル	ス	セ	ケ	エ
時	テシ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
		ハ	ロ	ム	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

長保頃点には、仮名音注850、類音注115、合計965の字音注がある。

本字音点の最大の特徴は、開拗音・合拗音いずれも、仮名表記する場合にすべて直音表記を取る点であった。

開拗音

〔サ行・ザ行〕捨〈サ〉、灑〈サ〉^(音訳)、俛〈サ〉^(音訳)、奢〈サ〉、遮〈サ〉^(音訳)、邪〈サ〉、惹〈サ〉^(音訳)、麝〈サ〉、箏〈サウ〉、盛〈サウ〉、積〈サク〉、析〈サク〉、斫〈サク〉^(音訳)、錯〈サク〉、雀〈サク〉、輸〈ス〉^(音訳)、趣〈ス〉、洲〈ス〉、聚〈ス〉、終〈スウ〉、巡〈スウ〉、旬〈ス〉^(音訳)

〔サ行・ザ行以外〕客〈カク〉、逆〈カク〉、寵〈タウ〉、場〈タウ〉、鐸〈タク〉、笛〈タク〉、敵〈タク〉、勅〈トク〉、濁〈トク〉、猛〈マウ〉、梁〈ラウ〉、亮〈ラウ〉、慮〈ロ〉

合拗音

〔カ行・ガ行〕獷〈カウ〉、礦〈カウ〉、曠〈カウ〉、画〈カク〉、活〈カチ・カ〉、濩〈カム〉、冠〈カウ・カ〉、跪〈キ〉、歸〈キ〉、愧〈キ〉、卉〈キ〉、悔〈ケ〉、懸〈ケ〉、倦〈ケム〉

開拗音+合拗音

〔カ行・ガ行〕傾〈カウ〉（法華經単字 クキヤウ）、獲〈カク〉（法華經単字 グキヤク）

本発表で扱うのは、漢音系字音の混入の様相である。すでに肥爪（2020）で報告したように、本点においては、漢音形と解されるものが多く目に付く。

漢音形の例

邑イフ、営エイ、暎エイ、雅カ、飢キ、毳キウ、休キウ、禁キム、惶カウ、健ケム^(音訳)、窓サウ、耳シ、惹サ^(音訳)、染セム、啼テイ、提テイ^(音訳)、泥テイ、滌テキ？、溺テキ、怒ト、発ハ、法ハム、乏ハ、尾ヒ^(音訳)、微ヒ、儻フ、蕪フ、慕ホウ、麗レイ、榮エイ、怨エン、鳴ヲ

呉音・漢音併用の例

暎（アウ・エイ）、邑（オフ・イフ）、飢（ケ・キ）、微（ミ・ヒ）

その他、いわゆる百姓読みの例や、慣用音的な事例。

濩カム、熾シキ、稠スウ、占テム

石山寺本『守護国界主陀羅尼經』長保頃点は、仮名字体の点でも、拗音表記のあり方の点でも、他の資料とは隔絶しているのであるが、この資料における漢音系字音の混入のあり方が、他の資料と照らし合わせて、どのように位置づけられるのか、「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」を利用しつつ考えてみたい。

二

そもそも、石山寺本『守護国界主陀羅尼經』長保頃点（以下「本点」）は、訓点資料としての位置づけが、十分には明らかになっていない資料である。別筆の平安初期白点があり、長保頃点も白点（平安初期点の重複する巻五のみ朱点）であって、子音韻尾（入声韻尾・鼻音韻尾）の表記が流動的であるという古態を示しているが、本点に使用されている

ヲコト点は乙点図であるので、平安仏教（おそらく真言宗）における加点ということになる。乙点図を使用する訓点資料の仮名字体は、宇多天皇（寛平法皇）・仁和寺関連のものと、石山寺に伝わったものとに二分され、それぞれにおいてほぼ共通の仮名字体が用いられているとされているが（小林1979）、本点だけは完全に孤立した、他に類例を指摘しがない仮名字体が用いられている。

先に指摘したように、本点には漢音系字音の混入が目につくが、呉音系字音資料に若干の漢音系字音が混在するのは、むしろ通常の状態である。ただし、その混入の仕方は、当然のことながら一様ではない。沼本（1982）では、法華経・大般若経における漢音系字音の混入状況を分析し、同じ仏典に関係するものであっても、抽象化を経て編纂される音義の方が、字音点よりも漢音系字音の混入が少ないことが指摘されている。もちろん、字音点についても、訓読資料と直読資料とでも状況は異なるであろうし、それ以前に資料ごと（加点者ごと）の個性の要素も当然ある。

一方、般若訳『守護国界主陀羅尼経』が秦音系の音訳漢字（漢音系字音で読むが原則）による陀羅尼を含む仏典であるということにも注意が必要である（ただし、本点は陀羅尼に対する加点を有さない）。同様の資料である、高山寺本『大毘盧遮那成仏経疏』永保二年（1082）点・長治元年（1104）点について、築島（1986）に、「本文については所謂漢音系と呉音系との両者が、真言については漢音系が主流を成してあるやうに見える。本文の呉音系は、殊に長治点において著しいやうに思はれるが（以下略）」という報告もある。

西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点（訓読資料）には、意外に漢音系字音が目につくが、そうした南都仏教の系譜の漢音系字音混入の様相に対し、呉音・漢音を照合しながら、音形・表記（子音韻尾・拗音等）が整えられていったと考えられる、平安仏教（天台宗・真言宗）の漢字音の様相は、どのような点で連続的であり、どのような点で異なるのだろうか。その流れの中で、本点はどのように位置づけられるのだろうか。

以上のような状況を踏まえつつ、漢音の混入状況を整理することにより、本点の性質について、何らかの見通しを得ることができようか？

三

以下、熟語単位で、具体的な例について検討する（音訳語は除く）。

- ・（ ）内の訓読文は、高木神元校註（2000）『守護国界主陀羅尼経』（新国訳大蔵経⑫密教部三・大蔵出版）による（石山寺本の訓読ではない）。
- ・呉音・漢音は『五十音引き漢和辞典』（三省堂）により、『全訳 漢辞海』（三省堂）を補助的に用いた。

①「漢音+漢音」の熟語 確実な該当例なし。

熟語の二字ともに音注のある例は多くない。

音注があっても清濁・声調が分からない。

類音注 怨〈遠〉、瞑〈命反〉、乏〈法〉

直音表記 客〈カク〉（呉音キヤク・漢音カク）

鐸〈タク〉（呉音チヤク・漢音タク）、猛〈マウ〉（呉音ミヤウ・漢音マウ）

②呉音・漢音混読の可能性のある熟語

【怨敵】

怨 (呉音ヲン・漢音エン)

怨敵〈遠也着也〉(飢饉、怨敵等有りと)〔一〇・一八〕

怨敵〈遠反着反〉(諸の怨敵)〔三・一四〕

怨敵〈円反着反〉(能く怨敵を摧いて)〔五・一八六〕

怨敵〈エムタク〉(衆魔煩惱の怨敵を破し)〔七・一一二〇〕

怨敵〈ヲチヤク〉〔西大寺本金光明最勝王經平安初期点五・九七六〕

怨_(去)敵_(入調)〈オンチヤク〉〔根津美術館大般若經〕

怨_(去)敵_(入調)〈ランチヤク〉〔高山寺本新訳華嚴經音義二〇オ〕

怨_(去)敵_(入)〈ラムチヤク〉ヲ怨_(去)敵_(入)〈ラムテキ〉トモヨミ

〔読経口伝明鏡集一八七左〕

怨敵〈をんてき、あたかたき〉〔妙一本仮名書き法華經七・一一七五三〕

怨敵〈オンテキ〉〔黒川本字類抄中六九ウ〕

Vondeqi〔邦訳日葡辞書〕

魔怨〈遠〉(魔怨を降伏し)〔一・三一七〕

【欣慕】

慕 (呉音モ・漢音ボ)

欣慕〈コホウ〉(悲感欣慕して)〔一・九七〕

忻慕〈コンホ〉〔西本願寺本浄土三經往生文類〕

慕〈ム〉修〔聖語蔵本央掘魔羅經平安初期点〕

慕〈部於反〉〔九条家本法華經音〕

慕〈菩〉〔無窮会本大般若經音義六ウ〕

慕_(去調)〈ホ〉〔根津美術館大般若經〕

慕〈禾ホ_(去調・平調)〉〔観智院本名義抄・僧上二ウ〕

【窓牖】

窓 (呉音ソウ・漢音サウ〈漢辞海〉呉音もサウ)

牖 (呉音ユ・漢音イウ〈漢辞海〉呉音ヨウも)

窓牖〈サウユウ〉(種種の宝窓牖)〔一・一四一七〕

窓_(平)牖_(平)〈ソウユウ〉〔高山寺本新訳華嚴經音義二五オ〕

窓_(平)牖_(平)〈そうよう〉〔妙一本仮名書き法華經二・二四七六〕

窓牖〈(右) サウ、旦那〉〈(左) ソウ、大アサリ〉〔法華經読様⁴⁾〕

(旦那：天台宗覚運の門流、大阿闍梨：未詳)

Sôyô〔邦訳日葡辞書〕

窓〈禾ソウ_(上)〉〔観智院本名義抄・法下三一ウ〕

窓_(平)〈ソウ〉〔法華經音訓〕

牖_(上・平)〈ユウ〉〔根津美術館大般若經〕

牖〈ユ〉ヲ牖〈ユウ〉トヨミ〔読経口伝明鏡集一八七右〕

牖〈ユ、山〉牖〈ユウ、奈良〉〔(永正本法華經音義所引) 読経口伝明鏡集二五ウ〕

【村営】

営 (呉音キヤウ・漢音エイ) 村 (呉音ソン・漢音ソン)

村営 <スエイ> (村営、聚落) [三・一6]

村営 <しゆんみやう、むら> [妙一本仮名書き法華經四・六八五1]

村 (去調) <シユン> [九条家本法華經音]

村 (去調) <シユン> <スン> <ソン> [根津美術館大般若經]

営 (平) <キヤウ> [根津美術館大般若經]

営 <キヤフ> [觀智院本名義抄・仏下末二六ウ]

【遺乏】

乏 (呉音ボフ・漢音ハフ <漢辭海> 呉音バフ)

遺乏 <ユイハ> (多く匱乏して) [一〇・七7]

匱 (平) 乏 <クキホフ> [根津美術館大般若經] 「クキホク」もかなりあり。

匱 (平) 乏 (入輕調) <クキホク> [高山寺本新訳華嚴經音義四七オ]

乏 (入) <法ㄷ> [金光明最勝王經音義]

乏 <禾ホフ> [觀智院本名義抄・法下二一ウ]

貧乏 <法> (貧乏の者は) [一〇・二20] cf. 法 <ハム> 水 [四・一〇20]

【城邑】

邑 (呉音オフ・漢音イフ)

城邑 <オフ> (城邑、王都) [三・一7]

城邑 <オフ> (城邑聚落に入出するの時) [六・一三24]

城邑 <イフ> (城邑に往来したまう) [六・六5]

城邑 <オフ> [根津美術館大般若經]

城 (去) 邑 (入) [前田本字類抄・師]

Iōyū [邦訳日葡辞書]

国邑 <オフ> (自らの国邑を食らい) [一〇・三13]

国邑 <イフ> (一の国邑を同じくすべからず) [一〇・五27]

邑 <禾オフ> [觀智院本名義抄・法中一五オ]

Cocuyū [邦訳日葡辞書]

③漢音を含む熟語

a) 他の呉音資料にも見られる漢音系字音

【染著】

染 (呉音ゼム・漢音ゼム・セン) 日母字なので、呉音ネンが期待される。

染 <セム> 著 (心に染著無く) [一・一9]

染 <座塩反> [九条家本法華經音]

染 (平調) <セム> [専修寺本三帖和讃]

【映奪】

映 (映) (呉音ヤウ・漢音エイ)

映奪 <エイタム> (一切を映奪すること) [一・三11]

映奪 <エイタム> (映奪するが如し) [一・五9]

映奪〈アウタチ〉(映奪するが如し)〔七・一〇13〕

映〈阿有〉〔無窮会本大般若経音義二オ〕

映〈エイ〉〔薬師寺甲本大般若経音義一ノ一17〕

映_(去)奪_(入濁)〈エイタチ〉〔根津美術館大般若経〕

他の語もすべてエイ

映_(去)奪_(入濁)〈エイタツ〉〔安田本大般若経〕

4例ともエイ。他の熟語はエイ・ヤウ・アウが混在。

映_(去)奪_(入濁)〈エイタツ〉〔高山寺本新訳華嚴経音義八ウ〕

映奪〈アウタン〉する〔高山寺本大日経疏長治元年点九632〕

映_(去)〈衣伊反〉〔金光明最勝王経音義〕

映〈禾エイ_(平上)、アフ_(平平)〉〔観智院本名義抄・仏中四七オ〕

【奇麗】

麗(呉音ライノリ・漢音レイノリ)

綺麗〈キレイ〉(綺麗なる嚴飾)〔三・一8〕

綺_(去)麗_(平)〈キレイ〉〔根津美術館大般若経〕

麗〈例〉〔無窮会本大般若経音義一四オ〕

【歌舞】

儺(舞)(呉音ム・漢音ブ)

歌舞〈フ〉(種種の歌舞をもちて)〔七・七11〕

歌舞〈ム〉〔聖語蔵本央掘魔羅経平安初期点〕

歌舞〈カアフウ〉〔西大寺本金光明最勝王経平安初期点一・一三8〕

舞_(平濁)〈復有反、フ〉〔九条家本法華経音〕

舞〈禾フ_(平)〉〔観智院本名義抄・僧下五五オ〕

歌_(平)舞_(上濁)〈カフ〉〔前田本字類抄〕

Cabu〔邦訳日葡辞書〕

【啼哭】

啼(呉音タイ・漢音テイ)

啼哭〈テイコク〉(啼哭愁歎して)〔一〇・一24〕

啼_(平)哭_(入)声_(上)〈ていこくしやう〉〔妙一本仮名書き法華経六・一〇一八1〕

啼_(去)哭_(入)〈テイコク〉〔大慈院本四座講式〕

啼_(去)泣_(入)〈テイキウ〉〔根津美術館大般若経〕

啼_(去濁)〈タイ〉〔金光明最勝王経音義後筆〕

啼〈禾タイ_(平平)〉〔観智院本名義抄・仏中一六ウ〕

【禁戒】

禁(呉音コム・漢音キム〈漢辞海〉呉音もキム、慣用音ゴン)

禁〈キム〉戒(禁戒を受けず)〔一〇・二22〕

禁〈キム〉戒〔根津美術館大般若経〕この熟語以外ではコムもあり。

禁戒〈きんかい〉〔妙一本仮名書き法華経六・九五九4〕

禁〈キン〉戒〈仏戒〉、戒禁〈コン〉〈外道狗等ノ戒也〉〔南北相違集七ウ〕

禁〈去任反〉〔九条家本法華経音〕

【栄頭・栄禄】

栄 (呉音キヤウ・漢音エイ)

栄頭〈エイ見〉(栄頭を觀るに)〔一〇・五13〕

栄禄〈エイロク〉(光寵栄禄を受け)〔一〇・七7〕

栄〈キヤウ、エイ、二音〉〔金光明最勝王經音義後筆〕

栄〈禾キヤウ^レ〉〔觀智院本名義抄・仏下末二六ウ〕

【惶怖】

惶 (呉音ワウ・漢音クワウ)

惶〈カウ〉怖(極めて大いに惶怖し)〔一〇・九16〕

惶^(平)〈ワウ〉怖^(平)〔根津美術館大般若經〕

惶怖〈わうふ、おそれて〉〔妙一本仮名書き法華經二・三〇九1〕

惶^(平)怖^(平)〈クワウフ〉〔高山寺本新訳華嚴經音義五〇ウ〕

惶怖〈クワウフ、オソリオソル〉〔伊呂波字類抄六・五八オ〕

惶〈ワウ〉(正音注に傍書)〔觀智院本名義抄・法中四八ウ〕

【嗚咽】

嗚 (呉音ウ・漢音ヲ)

嗚咽〈ヲ 悦反〉(啼泣嗚咽して)〔一〇・七27〕

嗚^(上)咽^(入)〈ウエツ〉〔宝曆版四座講式〕

嗚咽〈ヲエツ〉〔元禄版四座講式〕

嗚^(去)咽^(入)〈ヲエツ〉〔金沢文庫蔵天台大師畫讃〕

嗚〈ウ〉(正音に傍書)〔觀智院本名義抄・仏中二八オ〕

【清雅】

雅 (呉音ゲ・漢音ガ)

清雅〈カ〉(清雅寥亮の美妙なる音声)〔七・七9〕

清雅〈カ〉ナリ〔高山寺本大日經疏長治元年点三672〕

雅^(去)〈夏、〉〔金光明最勝王經音義〕

雅〈禾ケ^レ〉〔觀智院本名義抄・僧中六九オ〕

【泥】

泥 (呉音ナイ・漢音デイ)

泥〈テイ〉(生死の泥より)〔一・一二9〕

泥^(平)〈度逝反〉〔九条家本法華經音〕

泥^(平)〈てい〉のぬれる〔妙一本仮名書き法華經二・二四二3〕

泥塗^(平)〈真云ナイ^(平上) テイ^(平濁平) ツ^(去濁)〉〔凶書寮本名義抄二二七〕

掩^(平)泥^(平濁)〈アムテイ (左エムテイ)〉〔根津美術館大般若經〕

b) (簡易調査では) 他の呉音資料に見えない漢音系字音

微 (呉音ミ・漢音ビ)

微〈ヒ〉風(微風吹動して)〔一・四10〕

微^(去)風^(上)〔西本願寺本阿弥陀經〕

微^(平濁)〈ヒ〉風〔前田本字類抄〕

Bifū〔邦訳日葡辞書〕

微細〈ミサイ〉(微細に～観察し已って)〔一・六9〕

清微〈ミ〉(清徹の声)〔六・一四16〕

微劣〈ミレム〉(皆な美劣なり)〔七・一〇20〕

微〈禾_一ミ〉〔観智院本名義抄・仏上二二ウ〕

飢(呉音ケ・漢音キ)

飢儉〈キケム〉(飢儉の世に於いて)〔一・一一24〕

飢〈キ〉餓(無量の飢餓の衆生)〔一・一一25〕

飢〈キ〉餓(飢餓渴乏せしめ)〔一〇・二3〕

飢渴〈ケカ〉(常に飢渴を患い)〔一〇・八8〕

飢餓〈けかち(ママ)〉〔妙一本仮名書き法華経二・三四〇4〕

飢〈禾_ケ(去)〉〔観智院本名義抄・僧上五六ウ〕

滌(漢音テキ・慣用音デキ・デウ)

飄滌〈テキ〉(諸穢を飄滌して)〔一・四10〕

蕩滌〈テキ〉〔金沢文庫本群書治要〕

滌〈音笛〉〔前田本字類抄〕

溺(呉音ニヤク／ネウ・漢音デキ／デウ)

沈溺〈チムテキ〉(悪趣に沈溺し)〔一・一二16〕

淪溺〈リテキ〉(常に淪溺す)〔一〇・一二12〕

沈_(平)溺_(入)〈チムニヤク〉〔根津美術館大般若経〕

Chindeqi〔邦訳日葡辞書〕

漂_(上)溺_(入)〈ヘウニヤク〉〔高山寺本新訳華嚴経音義一〇ウ〕

溺_(入)〈寂_ス〉〔金光明最勝王経音義〕

法(呉音ホフ・漢音ハフ)

法〈ハム〉水(法水を澍いで)〔四・一〇20〕

Fotsui〔邦訳日葡辞書〕

休(呉音ク・漢音キウ)

休〈キウ〉息(休息すること無し)〔六・一〇26〕

休_(平)〈ク〉息〔根津美術館大般若経〕

休_(平)息_(入)〈クソク〉〔専修寺蔵三帖和讃〕

休息〈くそく、やすむ〉〔妙一本仮名書き法華経二・二七八3〕

休_(平)息_(入)〈キウソク〉〔前田本字類抄〕

Qiūsocu〔邦訳日葡辞書〕

休〈禾_ク(平)〉〔観智院本名義抄・仏上七オ〕

耳(呉音ニ・漢音ジ)

耳璫〈シタウ〉(耳璫頸珠を以て)〔七・六9〕

耳_(平)璫_(平)〈ニタウ〉〔高山寺本新訳華嚴経音義四一ウ〕

耳〈禾_ニ〉〔観智院本名義抄・仏中二オ〕

発(呉音ホツ・漢音ハツ)

発〈ハ〉(阿耨多羅三藐三菩提心を発こし)〔七・八3〕

蕪 (漢音ブ〈漢辞海〉呉音ム)

荒蕪〈フ〉(寺は復、荒蕪して)〔一〇・七九〕

荒^(平)蕪^(平濁)〈クワウフ〉〔早稲田大学図書館尾張国郡司百姓等解文〕

怒 (呉音ヌ・漢音ド)

恚怒〈ト〉(心に恚怒無し)〔一〇・九五〕

毬 (漢音キウ)

毬〈キウ〉(手を以て毬を拍つに)〔一〇・一〇12〕

毬^(平)杖^(去)〈キウチャウ〉〔前田本字類抄〕

Guichō〔邦訳日葡辞書〕 「鞠」の字音の可能性は？

四

以上、本点の漢音系字音混入状況を見ると、一部、特有と思われる例はあるものの、後の呉音資料と共通するものが多い(平安初期の南都系字音との連続性は未詳)。秦音系の陀羅尼を含む仏典として、呉音を基調として訓読しつつ、漢音系字音が混入しやすい様相を示すと解釈できなくはないが、高山寺本『大毘盧遮那成仏経疏』永保二年点・長治元年点のような、顕著な漢音系字音の混入はない。

開拗音・合拗音を仮名表記する場合に、すべて直音表記をするという本点の異例の状況は、字音学習の未熟さによる、言わば我流の拗音習得の現れではなく、純粋な表記上の問題と考えるのが相応しいであろう。そもそも、上代や平安初期ならともかく、王朝女流文学作品においても漢語語彙が豊富に見られる(現存写本では、直音表記はサ行・ザ行に集中する)時代において、長大な漢文仏典を読み通すだけの学力のある者が、拗音の発音が十分にはできなかったというケースは考えにくいのである。

【参考文献】

大坪併治(1953)「^等守護国界主陀羅尼経の訓点」(『国語国文』22-11)

小林芳規(1979)「乙点図所用の訓点資料について」(『中田祝夫博士功績記念 国語学論集』)→小林(2012)『^{平安時代の}仏書に基づく漢文訓読史の研究IV 中期訓読語体系』(汲古書院)

高木神元校註(2000)『守護国界主陀羅尼経』(新国訳大蔵経⑩密教部三・大蔵出版)

築島裕(1986)「高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏永保点解説」(『高山寺訓点資料 第三』高山寺資料叢書 第十五冊)※『著作集 第七巻 典籍解題』には入っていない。

沼本克明(1982)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院)

肥爪周二(2020)「石山寺本守護国界主陀羅尼経長保頃点の漢字音」訓点語学会、オンライン、2020.10.18

——(2023)「平安時代の仮名表記一書き分けない音韻を中心に」(『言語研究』164)

【引用資料】略